教材分析のための破格論（Ⅰ）

——変形生成文法派の検討——

塚　田　泰　彦

1. はじめに

G．N．リーチは，新ファース学派の言語理論を軸に，〝英詩の文法〟を概略記述する作業の一環として，破格（deviation）を八つに分類した[1]。斯学の基本概念である言語の階層（levels）に準拠したこの分類が語ることは，あまりに基本的な次の二つのポイントである。ひとつは，破格というものが，何に対する破格なのかというその準拠の設定に応じて分類されるものであるという事実，もうひとつは，各々の破格を単に現象の分類に留めないための方策として，その破格の機能・効果を活々とした価値体系の中で記述出来るような準拠を設定すべきであるという点である。この二つの兼ね合いには，実に輻輳した学問上の問題が生じるとはいえ，本来はひとつの作業の両面としてその成果をあげるべきものである。しかしながら，敢てここで，この二つの面を別個に考えざるを得ないのは，次の理由による。このリーチの例を始め，今日の様々な精緻な破格の記述（分類・検討）は，各々が一定の言語理論に依拠したものであり，このため，例えば詩とか小説といったいわゆる表現即ち効果の問題を前提にした価値論に適切に関与するかどうかといった面とは，本来が一旦切り離した上でなされる作業である。そのために，個々に切り取られた破格の記述は，言語現象の一片の一面的な記述という域を出ないのであり，こうした言語学的記述が効果を前提にして生じる言語現象の諸様相との間に持つことになる溝（ギャップ）は，結局は各々の言語理論の方法そのものに内在するものなのである。言語の表現効果を圧倒的なものとして認識して来た文学研究者達から，言語学的手段が，彼らの意を殆ど満たさないものであるとして久しく斥けられて来た理由もここにある。その意味では，やっとこの溝に言語学の側からのアプローチが始まったのであり，それは今日の言語理論の〝意味〟への踏み込みに係っての成果とみていいのである。

しかし，本稿が，敢てこうした言語理論の展開が何処まで言語表現の効果の襞にまで分け入ることが出来るかという点にポイントを置いた破格論でないのは，単に今日的成果が未成熟なものであるという理由に依るのではなく，確固たる方法を以って取材された個々の言語的事実（破格）を言語教育という視野から〝教材分析〟にどう生かすかを検討することにそのポイントを置いているためである。教材を分析する場合に〝破格〟という観点がどう使えるのかという面と，この摘出された個々の破格そのものを教材の解釈・指導のためにどう組み立てるのかという面を分けて考え，前者について二回，二つの学派（変形生成文法派と新ファース派）を取り挙げ，さらにそれを活用する作業として，後者について一回，計三回に分けて本稿を展開するつもりである。（注：破格の研究といっても，ここでは，文体分析・言語学的文体論といった用語との間に厳密な

区別は何も設けていない。）

2. 変形生成文法派・1960年代の方法と成果

R．ファウラーは，1930年代ごろから活発な流れを形作っていた，W．エンプソン，C．ブルックス，D．デーヴィ等の実践批評が言語学的興味の範囲内にあるとは言え印象主義的であったことを踏まえ，これとはっきり区別した上で，今日の言語学的批評の成立を支えた先駆論文として次のようなものを挙げている[2)]。Trager and Smith（'51），H．Whitehall（'51）（'56），S．Chatman（'55）[3)]。そして，その依拠する言語理論の明確かつ適切な応用が始まったとき，言語学的批評の今日の二つの流れが形成されたとする。彼は，この二つのスタイルを，'trans-formational－generative mode'，'levels－and－categories method' と呼んでいる。今回取り挙げるのは，前者であり，この派の先鞭をつけたのは，S．R．レヴィン（'62）[4)] である。

ところで，破格というものは，言語現象の束となって生じる幾つかの規則性の或る破壊を指すのであり，その場合，'言語のバックグランドに対して生み出される破格' と '文学ジャンルとしての詩なら詩の伝統に対して生み出される破格' という2つの基本的な区別を前提にしなければならない[5)]。しかし，レヴィンの観点は，こうした確認よりもむしろ，例えば「リズムや頭韻は通常の言説に現われないというのではなく，むしろ詩におけるこうした形態の体系的な組織化がひとつの破格を提示するのである[6)]」といった考え方に特徴的に現われる。即ち，通常ランダムにしか現われないものにひとつの組織化の意識が働いて，詩の破格は生み出されると見るのである。その意味でこそ，詩の破格は形式の属性となると言うのである。詩の言語学的批評の立場にあって，まだ海のものとも山のものともわからない変形文法を活用するには，レヴィンにはあまりに多くの活々とした詩の言語的側面が見えていた。そのために，分析の対象を変形文法の理論に見合った統語レベルの破格に限定したとしてもなお，文法性の問題に関してこの理論の抱える複雑な主題を遠望するとき，こう言わざるを得なかったのである。即ち規範文法の確立と逸脱（破格）の許容度をにらみ合せた上で，敢て「詩の様々な効果の幾つかを説明出来る或る別種の文法を生み出す必要はないかもしれない。」とはいえ，「少なくとも（こうして）分析の幅を広げることが，（詩において）存在可能なモデルを導けるようなものでなければならないことを示すこと」がまずは急務である[7)]，と。またそのためには，詩における言語的単位に課されることになろう新しい種類の限定を考慮出来るよう，また何らかの自由さを許容出来るよう，文法規則は修正される必要があろう，という予測の下に彼は一歩を踏み出したのである[8)]。

レヴィンの分析は，主に，1）a wrong word order，2）a wrong word selection，及び 1），2）の組合せについて成されたものである。これは，1)' a phrase－structure or transformation rule，2)' a word－category rule，及び 1)'，2)' の組合せという変形文法の規則をそのまま活用する形で展開したのである。この場合，'言語のバックグランドに対して生み出される破格' の分析が中心となるのは当然であるが，彼はこの作業のために，さらに

この破格を，〝それが生じるテクストに対する破格′と〝広くその言語（英語）についての破格′の二種類に区別している。（この点は後で言及するので，別の点から）彼のこの分析の特徴をみてみると，それは，変形理論の表立った展開が，1)′の規則即ち言語のパラディグマティックな面（2)′の規則）よりもシンタグマティックな面にあったにもかかわらず，むしろこのパラディグマティックな面に力を注いだことだろう。彼は，「どんな詩の言語学的分析も，シンタグマティックな面を処理しなければならない，というのも，この面は分析に直接役立つからである。しかしパラディグマティックな面も同様に重要である，というのは，詩が編み込む（incorporate）構造は，単に詩を〝syntagms′の連繋と捉えるのではなく，むしろ〝paradigms′の体系として捉える場合により速やかに理解可能となるからである。[9]」という。（今日，このパラディグマティックな面からの破格の研究は，新ファース派の研究を刺激し，この派にみるべきものが多い。それはまたその依って立つ言語理論の性格によるのであるが。）

さて，レヴィンのこの一歩によって（変形文法を活用することによって），単にその文が破格かどうかを旧来になく明確に決定・記述出来るだけでなく，破格文が互いに如何に異なっているかを明確化する手段が示されたのである。彼は，1）の〝word order violations′の分析例として，E．パウンド，D．トマス，H．クラインの詩を取り挙げ，また，2）の〝word－category violations′の例として，e．e．カミングス，D・トマト，D．H．オーデンの詩を取り挙げ，各々の文例が，どういう〝mannar′どういう〝degree′で破格かを提示してみせた。ちなみに，別の論文[10]での同様の分析例では，E．パウンド，D．トマス，H．クラインの詩を取り挙げ，その破格の程度を，パウンド〉トマス〉クラインの順として示している。

ところで，このレヴィンの変形文法の活用は，当時の状況（〝標準理論′以前）から言って，ごく表面的なものに終わっているが，単にそれを時期的なものと捉えるよりも，彼はもっと別の面から深く詩の破格の問題に分け入っていたと見る方が，彼の仕事を正しく評価することになろう。先にも触れたように，変形文法の活用は，まだ多くの点で非文法性の記述に欠陥があり，敢えてその理論の枠内で詩の分析を行うと，どうしても一筆書きのような平面的な記述に終始せざるを得ないところがある。それに対して，当時の破格研究の状況は，殊にM．リファテールの〝文体論的文脈′の問題[11]がクローズ・アップされて，むしろ変形理論が切り捨てているに近かった文脈・意味の問題に中心があったのである。レヴィンがパラディグマティックな面を敢えて強調したのも，こうした背景あってのことだろう。以下で，彼が腐心したこの文脈問題との関係での貢献の一端に触れよう。

ここでリファテールに言及する余裕はないが，彼の〝文体論的文脈′の考え方や〝原－読者′問題，〝ミクロ文脈・マクロ文脈′の区別等は，今日まで多くの議論を呼んでいる。レヴィンは，〝文学ジャンル内の伝統に対して生み出される破格のベースになる規範（canon）′と〝言語の背景に対して生み出される破格のベースになる規範（norm）′とを比べた場合，前者は比較的よく定義されていて説明し易いのに対して，後者はむしろ我々の言語による〝経験′を通して記憶の中に組み立てられるものであるため，流動的であるという[12]。勿論この流動性が適宜その

破格現象を支えるとみるのである。これは，リファテールの考える文脈意識を踏まえてみれば明らかなように，どんな破格もそれが繰り返し使われれば，その文脈の中ではひとつの規範や文脈上のベースにすらなりかねないものであるということである。即ち，〝規範の破壊としての破格〟と〝予期の破壊としての文体的効果〟とは，軌を一にした同一現象ではないのであり，幾種類もの文脈・パターンは特性の束として個々にその成立と破壊を繰り返しながら，潜在化したり顕在化したりして，その相補性によって読みの現実を形作るものなのである。確かに規範としての文法を定義すれば，その意味での言語的破格は記述出来るのであり，変形生成文法派の破格分析はこの面に限定されるべきものである。しかし，破格というものに文体的効果といった面からの評価を導入し，ひとつの詩における破格分析の効用を期す段になると，どうしてもこうした文脈問題に触れざるを得ないのである。

レヴィンはこの点に注目し，さらにこの点でのリファテールの〝ミクロ・マクロ文脈〟の考え方を批判的に展開して，〝内的破格（internal deviation）〟と〝外的破格（external deviation）〟の区別を立てた。端的に言えば，リファテールは，語・句・文といった言語単位の枠組を取払って，線条的な言語現象を前提にしてひとつの予期の破格を説明出来る最小単位を〝ミクロ文脈〟とし，こうした〝ミクロ文脈〟を支える〝short－range norms〟を形作るものとして〝マクロ文脈〟の機能を見ている[13]。しかし，レヴィンはこの〝マクロ文脈〟が〝ミクロ文脈〟内の破格等に正当な理由付けを与えるとは考えられないとしている[14]。我々の言語感覚や読みの現実から言って，レヴィンのこの厳密な判断が妥当かどうか逆に疑問の残るところであるが，彼の批判が，読者の認知内容の説明・解釈にあるのではなく，飽くまで言語現象を言語学的説明に換えようとする点にあることは注目すべきことである。彼は，〝内的破格〟と〝外的破格〟を次のように区別する。〝内的破格〟とは，「その詩のバックグラントに対して生じるもので，そこではその規範となるものは，破格の生まれた詩の〝remainder〟（残りのもの）である」。また〝外的破格〟とは，「破格の生じたその詩の範囲を越えて存在している或る規範によって説明されるべきタイプの破格である」。[15]（補説：この区別は，R.ヤーコブソンの等価性の問題を踏まえてレヴィンの立てた等価性の二つのタイプ〝positional なもの〟と〝natural なもの〟[16]と合せ考えると，〝counling（対句法）〟[17]といった彼の研究テーマの背景も理解し易くなる。）

ところで，この区別は破格分析に当って変形生成文法がどこでどう生かされるべきかを考える彼の手立てだったのである。彼の考えを整理すると，音韻レベルの破格は，(1) もしそれが伝統に対して生じる破格なら先に述べたように説明し易い，また(2) 言語のバックグランドに対して生じる破格のうち，広くその言語（英語）についての破格なら，これは極めて稀にしか生じない。

音韻レベル	外的破格	(1)	ということは，音韻レベルでは外的破格は殆ど考慮する必
		(2)	要がない。加えて（3）このレベルでの内的破格は，ひと
	内的破格	(3)	つのテクスト内に限定された特徴ある音を捜すか，そのテ
統語レベル	内的破格	(4)	クスト内の音韻の量的判断を行うかであるから困難な分析
	外的破格	(5)	とはならない。一方，統語レベルについて言えば，（4）例

えば一連の宣言的陳述が成される詩での命令文や疑問文の出現は，ひとつの内的破格を構成する。同様に，直説法中の仮定法や一連の単文が複文によって破壊される場合といった例もこれに当たるので，このレベルでの内的破格は比較的説明し易い。そして最後に残った（5）この統語レベルでの外的破格を説明するための（外的）規範として大いに役立つのが，変形生成文法だというのである。先に分析の一例を挙げたように，レヴィンの破格研究（文体分析）は，こうして，この統語レベルの外的破格の記述に新しい一歩をしるし，今日の展開を導いたのである。

この派の成果やそれに対する批判を概観する前に，レヴィンの後を追って登場したT．P．ソーンの論文を検討しよう。

ソーンの研究の中心は，文法性の問題にあった。例えば，レヴィンが，e．e．cummings の詩の一文〝He danced his did.′の分析上，文法規則として，（1）N→ did か (2) NP → T＋V かのどちらを選ぶべきかについて触れた点[18]を受けて，ソーンは，このどちらの規則を組み入れた方がより多くの不必要な文を生成することになるかが問題であるとしながらも，結局この種の規則を導入することは，莫大な数の不必要な文を受け入れることになるか，ないしは，あまりに複雑なため実質的には意味のない言述を含む文法を受け入れなければならなくなるという[19]。確かにレヴィンの意図は，このカミングスの例のような文を生成することが出来るような文法であると同時に，例えば，〝We thumped their hads.′といった直観的に文法的でないと分かるばかりか現に検査してみようのない文は生成されないような文法を考えることにあった。しかし，この種の方向で文法を考えることは，あまりに文法を複雑なものにすると同時に，結局は〝use（使用）′が形態上の基準を形作らざるを得なくなる以上，文法の生成許容能力はその言語学者がその構造をどこまで受け入れるかという複雑性の度合に応じて決定されかねなくなる。ソーンは，このディレンマに立って，「文体論の統語上の第一の仕事は，詩のあらゆる現実の文を生成出来るように標準英語の文法を調整することによってではなく，こうした（カミングス等の）言葉の構造を充分記述出来る別の文法を見い出すことで充当すべきだ」[20]と考えた。これは，S．サポルタの論点―「文体分析は，明らかに基本的には，指示的（predictive）であるよりは，分類的（classificatory）であり，」その目的は「メッセージの或る特定のクラスとして分類される形態を示し得る類型学である。」そして，「理想は，各々の異ったメッセージがこうして定義された特性の集合によって，独自に定義されることである。」[21]―を受けて，これに自ら展望を与えようとしたものである。即ち，変形文法の規則を組み替えることによって詩に現われるような破格文も記述できるようにするのではなく，この理論をベースにしながらも，サポルタの論点に立って〝クラス′概念を導入することで詩の文法規則を独自に組み立てようとしたのである。（先に触れたレヴィンもこの〝クラス′概念の導入の立場に立っていたことは付言しておかねばならない。[22]）

ところで，この考え方は，結局はレヴィン同様，パラディグマティックな面での押えを基本にするもので，その長所は，意味的側面を考慮に入れながらも変形理論が様々なデータから引き出して来るその文法の生成のための限定（制限規則）を一々編入しないで済む点である。しかし一

方では，逆にこうした〝クラス〟のひとつ一つを理論的に定義し，区別することが困難だという短所と抱き合せの形になるのである。サポルタの理想はともかくも，ひとつの〝クラス〟を形作る〝特性α〟を見い出したなら，この〝特性α〟を他の特性から区別する規則が存在するだけで，具体的に〝特性α，β，γ，……〟と数え上げてみても，各々の特性を他との関係で（構造的に）区別することが出来ないのである。今，仮にこうした作業・分析が言語学的に記述出来たとしても，さらに重要な問題点が残される。ごく大雑把に言えば，詩の文法のための区別あるいは規則の導入といった判断（操作）が，実際のところ或る詩を理解（解釈）する上での要目となるわけで，これはそのまま〝批評の要目〟との区別を付け難くする一線まで踏み込んでしまっているということである。ソーンの方向で詩の文法を組織するための規則を構想しても，文法一般の規則との間には，なお文芸批評上の問題がそのまま重なって来てしまうのである。言葉を換えて言えば，ソーンが提示してみせる規則は，変形規則として導入しようとする者も出て来れば，またそれは批評要素に過ぎないと見る者も出て来るということである。ソーンにとって，ひとつのディレンマを乗り越えるということはまたこの種のディレンマを引き受けるということでもあった。彼は，「文の文法的分析は，その意味のメタ言語的言述ではないが，違った分析者による或る文と別の文との分析上の相違または同じ文の分析上の相違は，意味上の相違を反映する」としながらも，「私の示した詩のための文法と私の詩の理解との間には，仮えその関係を分析することがむずかしくとも，ひとつの関係というものは存在する[23]」という。彼をここまで踏み込ませた動機は次のようなものであろう。即ち，非文法的な文（破格）は，適格文を充分に生成出来ないから，もし破格であることを示そうとすれば，それに適用すべき別の可能な分析のひとつを選ばねばならなくなる。それは，レヴィンが試みたような新しい規則の編入といったもので片付けることの出来るものではなく，独立にその破格を説明出来る文法を作ることを意味する。もしそうしなければ，〝あらゆる文体研究は或る意味でテクストと関係するにもかかわらず，同時に文法の組織へと導くものではない〟[24]というディレンマに陥ってしまうのである。

さて，ここで上に述べた方向での具体的な成果について，二，三点触れてみよう。ソーンはまず，個々の詩によって，その破格分析に適用するに相応しい変形理論の規則が存在することを示した。彼の分析によれば，e.e.カミングスの詩には，〝subcategorization rule（下位範ちゅう化規則）〟が，またJ.ダンの詩には，〝selectional rule（選択規則）〟が，その時の破格特性を示すには適切な規則だという[25]。これは，レヴィンの分析の当然の展開とも考えられるが，単に目先を変えただけの成果ではない。ちょうど，レヴィンにとって文脈問題が大きなポイントであったように，ソーンにとっては，〝ディスコース〟という概念が支配的なものとなっていたのである。先に引いたサポルタの言にもあった〝observed〟だが〝unanalysed〟な文こそが文体論の対象であり，この種の文は〝ディスコース〟の或るタイプとして性格付けることが出来るという点，さらに或る種の〝ディスコース〟には，同じタイプの破格の傾向が存在するという点が，このソーンの分析を支えているのである。ソーンは，「詩に破格文が生じるという単なる事実以上に興味のあることは，詩におけるその破格文が或る顕著な一貫性を示す傾向にあることや，同

じタイプの破格が展開されて一連の文となる傾向が存在するということである」[26]といい，事実このことが〝good poetry〟のためのひとつの必須条件と見てよさそうだという。そして，こうした分析結果を踏まえてこそ，彼はまた「詩にみられる文法的破格の種類を単にリスト化することは，比較的益が少なく，むしろ標準英語の文法とは違った文法を手に入れるためにその詩が書かれている言語について語る方がより有益だ」[27]と言明したのであった。彼は変形理論がもたらした深層構造と表面構造の区別の明確化を詩の分析に活用することによって，さらに次のような成果を得た。即ち，「たいていの文体上の判断は，深層構造と関係がある」のであり，「標準英語の文法と表層構造でしか違わないような文法に基づく詩は，一般にまずい詩である。[28]」という点である。換言すれば，「good poetry において，詩人が創造する言語にもたらす標準語との相違は，基本的には深層構造における相違である」[29] ということであり，ここにこそソーンは，詩的言語の基本的性格が横たわっていると見たのである。

以上　レヴィンとソーンの研究成果を（紙数の都合上）具体的な分析例を極力引用しない形で，概略追ってみた。要点を繰り返す代わりに，W. O. ヘンドリックスの批判[30]を要約しておこう。

1）　レヴィンの〝生成文法分析〟も，ハリス（'52）の〝ディスコース分析〟も寸足らずだとして，ソーン（'65）は，その一解決として批評への道を開拓した。しかし，ソーンの欠点は，〝reference〟の文法的枠組から詩的テクストへアプローチするという，結局は間違った展望を与えたことである。この点では，今一歩とは言え，リファテールの〝詩の語彙論的側面〟に焦点を置く仕事の方が評価出来る。

2）　ソーンは文体研究が，文法の構造としては導かれない〝テクスト〟というものと或る意味で関係している点，及び同一テクストに同じタイプの破格が生じる傾向があることを指摘したが，彼のこうした方向での記述（分析）は，理論的な用語を含まない形のものであり，またデータに対する一対一の単一な関係を保った用語ではない。この理論的な用語の欠如が文体論研究における批評的欠点となる。

3）　ソーンの詩のための規則の設定は，その言語の文法と殆ど〝isomorphic（同一構造の）〟なものとして文学的方言（literary dialect）の文法を作ろうという方向にあるが，結局は実際にその詩に起こり得ないような文まで生成してしまう規則である。仮に「ひとつの詩が標準語の一方言の例として取り扱われるべきものだとしたら，その判断は，所与の詩が表現している方言と同一の言語で書かれた他の全ての詩に現われた方言との関係で成されるべきものである。」[31] 一般に文学的方言の研究には，三つの判断の可能性のレベルがある。(1) 全ての詩はどれであれ異った方言（偏差）を示す。(2) 一人の詩人の詩は全て同じ方言を示す。(3) 同一言語で書かれた全ての詩は同一の方言を示す。こう分類した場合，ソーンが(1) の場合（即ち個人のひとつのテクストの記述）を念頭においていることは明らかであるが，不充分である。というのも，あるひとつのテクストの〝文法〟へと傾きがちな分析でありながらも，結局基本的にはそのテクストに現われた（文学的方言の）〝言語〟について言及しているに過ぎない。もしこうした個々のテクストの文法間の関係に言及しない形で分析を押し進めると，レヴィン

同様の困難に直面するはずである。

4） レヴィンを受けて，文学的方言の文法を編み出そうというソーンの意図は，その結果，例えば先のｅ．ｅ．カミングスの文例〝He danced his did.〟の〝did〟の解釈にあるように，これを（N→ did）として〝（−N，＋V）→（＋N，−V）〟と〝do〟をみるに至った。しかし，この判断はソーン自身あいまいな根拠しかないと言明しているし，生成文法の粋からは除外されているものでもあり，〝do〟そのもののもつ意味素性のかなりの変更ということにもなりかねない。ソーンは，この詩句を〝厳密下位範ちゅう化規則〟の破格としてその特徴を示しているが，むしろこれは，統語的破格とみるよりも，もっと単純に語彙的変革（lexical innovation）の現われとみるべきものである。こうした例が示すように，ソーンの分析は，文法理論より意味理論の展望の下に成されるべきものである。

以上のヘンドリックスの批判は，チョムスキー（'65）[32]にみられる，〝選択規則〟の統語論から意味論への変換が可能であるとする言明を背景にしたものであり，この点についてはソーンも慎重な考慮に価するとしているが，ひとまずここでは，ソーンの意図の再確認の意味で，このヘンドリックスの批判に対する彼の反論を挙げるに留める。「（統語論であれ，意味論であれ）詩のための文法を組み立てるポイントは，人がそこでその文に見い出す意味について正確な言述を成すことを可能にすることである」，その意味では，「〝よく仕上げられた文法的モデル〟の脈絡内でのみ文体分析を試みることが，sensible（分別ある実際的なこと）である。」「ヘンドリックスは，詩について私が示した類の文法とその解釈との間には，必然的な関係がないと批難するが，私にはそのような関係を打ち立てることが可能かどうかは分からない。（それは個人的な美的判断の問題だと思われる。）」[33]と。

3. 文体分析のための変形生成文法理論活用の要点

レヴィン，ソーンと並んで，早くから変形理論を活用し，この二人が多くの問題を抱えていたのに比べれば，同じ時期に既にこの派の基盤を明確に見据えた論文を発表していたのは，R．オーマンである。彼が1962年に発表した〝B．ショーの散文の統語的分析〟[34]を見ても明らかなように，この時点までレヴィン同様R．ヤーコブソンの言語理論に刺激を受けた分析を行っていたのであるが，詩の分析と違って，散文の文体の研究に目を向けていた点で，先の二人とは違い変形文法活用の途に一歩先んじた安定した判断をもたらすことが出来たのかもしれない。変形文法活用の彼の論文については，二点邦訳[35]もあり，ここでは，彼の判断を踏まえた形で，文体分析（破格研究）に対するこの派の論点を整理し，今日の展開を跡付けてみたい。文体論の最終的な目標は，文体の形式的記述から批評的・意味論的解釈へと進むことであり，こうした展望をもってこそ，レヴィンにしろソーンにしろ，多くの問題を抱え込んだのである。

1）〝変形〟というものの効用

「文体の分析者たちは，音，比喩的用法，イメージ，語法，接続の仕組み，相似構造等々について語りながら，これら考察対象の中で，いずれを上位あるいは中心におくかといったこと

に対する心配りは，全くみられなかった」[36]とオーマンは言う。確かに，例えば「よい観察であれば，どんなひとつを取っても，それを充分に深めれば必ず作品の核心に達すると固く信じているし，このことはゼミナールで，学生の一人が出した或る特定の問題点から出発するという方法を色々その学生達と行った経験からも立証できる。どうしても出発点としなければならないような，他に優先する有力な地歩は存在しない。どんなものでも充分観察すれば，有力な地歩となり得るし，どんなに恣意的に選択したものでも，正しく発展させれば，結局その恣意性はなくなる」[37]というレオ・シュピッツァーの言葉は，多くの文体研究者を支配して来たであろう。しかしまた，今日チョムスキーによって統語構造の研究にもたらされた成果には，圧倒的なものがあった。旧来の言語学的批評はせいぜい詩の音韻レベルの分析に留まっていたのである。この変形文法を活用するしないは別にして，統語レベルへ分析のメスを入れ始めた今日の研究者の立場は，次の言葉から充分うかがうことができる。「統辞の働きは必ずしも他の働きと比べてより重要な役割を果しているのではなく，音や意味論の面で，より強力な回帰的体系に完全に掩われていることさえある。しかし現実の詩的働きに類似する作用図式の作成を目指す者は，必然的にこの統辞の働きを第一にすえる。なぜなら，この働きは言語材料の現われを組織しているからである。」[38]

普通，作家の文体とは，その言語体系内にあって用いることの出来る任意選択要素の特徴的な運用法と見ていたわけであり，この〝特徴的〟運用法という言葉に含意されているものが，広く言えばそのまま偏差（破格）である。そして，この任意選択の問題に根拠を与え得る言語学的基盤が形作られるようになって始めて，言語学的批評は成立したのである。今日，言語理論の殆どがこの〝選択〟の問題を中心に，シンタグマティックな面とパラディグマティックな面の二面を如何に組み上げるかに腐心しているが，句構造規則と変形規則によって，一応シンタグマティックな面に画期的な記述法を提供したのが変形生成文法である。

この記述法は，「いずれが，原文の文体的異形であり，いずれが別のことを言っているのか，われわれには直観的にわかるかもしれないが，しかし，それを確証することは大変なことである。構文間にみられる一定の，形式的に述べうるような選択的な関係を与える文法があれば，明らかに，助けとなるだろう」[39]という要請に答え得るものであった。換言すれば，（初期の理論に言う）〝核文〟からの，同一の基本的文法単位からなる異なる構成物である〝非核文〟即ち〝別の言いまわし〟という文体概念は，変形文法の枠組の中ではじめて明確な対応物を持つことが出来るのである。その場合，殊に〝変形〟が，単一の記号（N，VP etc.）ではなく，記号列（即ち構造を持ついくつかの要素）に適用されるのに加えて，その〝変形〟が将に，その構造に基付いて或る記号列に適用されるという点で，構造の一部を無変形のまま残す（即ちもとの記号列からのいくつかの特性を変えないで残す）という点が重要なのである。言語現象というのは様々な特性の束なのであり，破格とは他の特性に優先して感じられる或る特性上の変異であるという考え方に，これはそのまま見合うものである。また，「詩における破格は殆どが音韻レベルでではなく，統語レベルで生じる」[40]というレヴィンの言葉を思い合わせる

とき，文体分析に期待された変形理論の位置が明らかになるだろう。勿論，〝変形〟によって，〝意味〟が多分に変化してしまうようでは，こうした論拠は与えられないのであるが，〝カッツ・ポスタル仮説〟以降の専門的な論議はともかくも，一応許容出来る範囲での充分実効力のある分析手段を提供したのである。

2）表面構造と深層構造の区別の効用

文法の句構造部門は，直観的に感じられる文相互の異同関係を説明する訳ではないので，チョムスキー以前の〝ＩＣ分析〟が文体研究に直接貢献することはなかった。しかし，句構造に適用されて別の句構造を導く〝変形〟という考え方は，〝主として意味情報を含む深層構造に関係する基底部句構造標識（ base Phrase－ maker ）によって示される構造〟と〝主として文の音形を決定する表面構造を形成する派生句構造標識（ derived Phrase－ maker ） によって示される構造〟の二つの性質の異なるものを認めることに理論的根拠を示したのである。そして，この二つの構造の区別の上に〝変形操作〟によって文相互の異同関係の説明が可能になったということが，文体分析についての今日的な展開を促したのである。（もっとも，変形生成文法理論が研究の目標としている内容と文体分析は直接結び付く訳ではないので，手法として文体分析にこの理論が使われるときには，多少とも形ばかりの応用という面も出て来ざるを得ない。例えば，初期の変形理論の枠組の中でオーマンが示したような，独自の文体を有する作家は核文の特徴的結合法を持っているのだとする研究が，単に理論的修正を経た今日の変形理論にとって核文の考え方があまり重要な概念でなくなってしまったからといって，そのまま効力を失ってしまうかといえば，そうではない。この辺りが，手法としての文体分析の性質を考える場合に常に問題になるところである。）

ところで，深層構造と表面構造の区別は，目下，変形によって文相互の異同関係を説明して文体の型を比較するという面でよりも，破格そのものの説明に光を投げかけるという点で注目されている。旧来のように何処がどう破格なのかを指摘するに留まらず，この区別を通じて，その破格が生成して来る過程が説明出来るということが重要なのである。即ち破格現象は，その非文法的な構文の根底を形作る基底文に基付いてその構文を分析することで，より明確な記述（説明）を与えられることになる。またこうした記述が可能になるということは，そのまま或るレベルでの我々のその文の理解過程も説明出来ることを意味する。このことをソーンは「〝準文〟の非文法性は，それらに統語構造がないために生じた結果ではなく，どの統語構造とも違う統語構造があるために生じた結果である」[41] として，破格の旧来にない深い説明に望みを託している。ここでの要点は二つである。ひとつは，破格そのものの新しいより本質的な記述(説明)の可能性と，もうひとつは，破格文の理解過程についての説明の可能性の問題である。

前者については，ａ）個々の破格をその基底文からの生成によって記述する作業を通じて，その作家個有の破格の型（特性）を捉えること，及び他の作家との比較，さらに詩的破格の一般的特性の説明，といった方向での一連の研究が目標である。また，ｂ）個々の詩のテクスト分析について言えば，そこに生じる破格間の関連の記述を通して，その詩の構造を説明するこ

とが目標となる。（尚，この点で，判断の基準をラフに取れば，＇形式＇と表面構造を，また＇内容＇と深層構造を各々結びつけて考えてみることで，詩の解釈に柔軟性をもたせることも出来ようし，さらには，＇basic meaning（基底的意味）＇と＇surface meaning（表層的意味）＇を区別して，R．A．ジェィコブス，P．S．ローゼンボームが考えてみたように，[42]＇作家の文体＇によって伝達される特別の次元の意味即ち＇表層的意味＇を問題にしてみることも可能かもしれない。）

後者については，恣意的な解釈を出来る限り避けるということが重要である。例えば，＇The dog chased the cat that killed the rat that ate the corn.＇と＇The rat the cat the dog chased killed ate the corn.＇という二文を比較して，第二の文の方が第一の文より理解しにくいという事実を，単に，第一の文が＇右枝分かれ構造＇であるのに対して第二の文が＇自己埋め込み構造＇であるという記述だけで済ますことは，変形理論研究の動向から言って問題を残し過ぎる。この一事によっても明らかなように，文の記述と文の理解の説明の距離の大きいことは，当初から了解済みのことであった。しかし，こうした＇埋め込み＇の重なりは実際理解に無理がかかるし，少なくとも読者をゆっくりした読みに導いてしまう。敷衍して言えば，一般に「文体的手法は，通常のメッセージ伝達とは異なり，必ずコード解読過程の＇遅延＇を惹き起こす」[43]ということであり，結局は，作者が表面構造を如何に制御するかが読者の深層構造理解の進行状態を決定するとみていいのである。このことを踏まえた上で，読者は破格に接したときその非文法的な構文の根底にある基底文に基付いて表面の逸脱を解釈すると考えれば，深層から表面への破格構文の記述と読者の＇読み＇をパラレルに位置付けることは，一応可能である。この方向での研究は今日まで具体的な成果があまり見られないと思われるが，破格や文体といった類の研究というよりも，テクストの＇読み＇の現実へのアプローチとして，今後言語教育上の問題にまで拡大して考えてみることが有益であろう。（この点で，リファテールの＇原－読者＇問題やオーマンの言う＇統語的密度＇の問題などは考慮に価する。）

3）変形文法の規則の活用と文体の型

先に見たように，レヴィンは或るひとつの規則を何例かの詩に適用し，その規則からの逸脱のレベルと度合を調べることによって，最もその規則において破格の著しい詩を指して，その詩の文体的特性として示した。ソーンはひとつの詩に対して様々な規則を適用して，その詩の破格・文体的特性を記述・説明するのにどの規則が適当かという作業を行って見せた。しかし二人の規則の活用は，＇変形操作＇を活用するといったものでないだけに，パラディグマティックな面での分析に力点が移行しがちであった。この種の研究は，ひとつの文体的特性をひとつの規則についての違犯と同一視する単純なもので，極論すれば，規則を数え上げ，細分化する分だけ，それに従って文体的特性を数え上げるということになりかねない。そこでこの欠陥から抜け出すためには，どうしてもシンタグマティックな面をうまく結合すると同時に，その基盤を理論的に支持された領域に限定しはければならないということになる。今日からふり

返れば，当時のレヴィン，ソーンの研究は以下に示す二つの方向での研究の可能性を孕んだままの分析であった。

その二つの方向とは，ひとつは，〝選択的な面〟と〝範ちゅう化された面〟とを文中の語の連繋の中に独自の関係として掬い上げてみること（例えば，〝代名詞とそれに先行する文中の先行要素との関係〟〝一連の文の主たる動詞の時制の関係〟〝一連の冠詞間の関係〟等の分析である。），またもうひとつは，先に述べた〝変形操作〟を同時に活用して，その規則違犯を跡付けることによって，その特性を何らかの〝変形の型〟として提示することである。前者の方向での研究の可能性は，新ファース派，殊にハリデーを中心とする〝cohesion〟[44]という考え方の導入によって，活況を呈して来ており，その成果が注目されるところである。ただ，この派の研究は個々の詩の具体的な分析というレベルでしか目下はその効力を維持しにくいところがあって，変形生成文法派が個々のテクストの分析から離れて或る普遍的な文体論的特性の説明に力を入れるのに比べれば，文体論的研究の成果を期待するというよりは，個々の詩（テクスト）の言語学的批評として実効力を有する段階と見なければならないだろう。この前者の方向での研究が，こうして一方では新ファース派の活況に掬い上げられ，他方また変形文法理論の修正・展開過程の中に多分にパラディグマティックな面が組み入れられたため，目下の変形生成文法派の分析は，後者の方向での可能性（〝変形操作〟の活用）に絞られた観がある。もっとも，変形生成文法には様々なレベルと機能を持った多様な規則があり，幾つかの面で学者間の対立もみられる。そこで，文体分析（殊に破格の説明）を志向する上でこの〝規則〟をどう捉えておくのが，目下の作業に安定した地歩を約束するかを考えねばならない。そしてその判断は，結局我々が文体分析という作業において何を行おうとするのかの内容によって決まるわけである。（1）単に破格を指摘する場合，さらに（2）その破格に生成という文法的説明を与える場合，また（3）その破格がその詩ないし言語表現一般に対して持っている効果を説明する場合，（4）その破格を他の破格との関連で（構造的に）説明する場合等，そのおさえ方は多様である。しかしそのいずれについても成果を期さねばならないのである。オーマンは，1965年の論文で，文体分析の研究のためには，「変形は，NPというような未完の抽象的記号から，完全に形成された文の各部分に達する方法ではなく，完全な形の文に適用される操作―順序の入れ替え，結合，付加，削除―と考えて」[45]みた方がよかろうという。例えば，この判断は明らかに（1）の破格を指摘する段階のものであり，レヴィン，ソーンとの違いと言えば，この四つの変形規則を使ったというだけのことである。しかし，この作業の一番有益な点は，或るテクスト（一連の文）に変形規則を適用し，同じ内容の別のテクストを提示することで，そのテクストの特有さが眼にみえて指摘されたということである。オーマンは，こうした作業を通じて，〝変形の型〟が感覚の鋭い読者が文体と認めるものの重要な部分を構成していることを確認するに至ったのである。（後日ソーンは，オーマンのこの仕事を受けて，同様に次のように語った，「文体論の印象主義的な術語の基盤となっている印象は何かといえば，それは文法構造の型の印象なのである」[46]と。）

さて，本稿の終わりのところで今日的な分析の例を取り挙げているが，その例を見てもわかるように，オーマン以来さして変わることなく今日まで，その文体分析は上にあげた目的の(1)～(3)を一括して問題にしてしまうことによって，言語学的手法による説明としては，相変らず(1)のレベルに終わっている。しかし，この(1)のレベルに確固たる言語学的記述を与え得たことが，さらにまた(2)のレベルについては別個にその作業を行えるという事実が，(3)のレベルの説明・判断に旧来にない根拠を提供することになったのである。多くの文体分析者が語るように，統語上の好みというものは，結局はその作者が経験というものをどう受けとめているかを我々に了解させてくれることになる〝意味の習慣〟との関連で問題にせざるを得ない訳で，現在の段階でこのレベルの明確な理論的根拠のある説明を望むことはむずかしい。そして恐らくこのレベルの説明が一定の展望の下に行われるまでは，さらに(4)のレベルの説明は何らその根拠を与えられないだろう。ただ，「詩人によって選びだされた逸脱構造は，その詩人固有の意味的衝動，固有の経験把握の方法によるもの」[47]であり，そこに或る種の一貫性のあることはこれまでの研究で確認されたのである。

以上，三つの観点から変形生成文法派の手法に言及したが，最後に一点だけ今後を占う問題に触れよう。それは，文と文との間に如何にして渡りを付けるかということである。

先に挙げた〝cohesion〟というハリデーの渡りの付け方は次回に譲ることにして，ここでは，この観点から今日までの文体分析を批判したO．ヘンドリックスの論文[48]の要点だけをまとめておこう。第一の論点は，非文法的な文を了解するのに必要な文の範囲はごく狭いとはいえ，やはり多くの発話がそうであるように，それは相互に関連する言説として，またひとつのシチュエーションを待って，了解されるということである。チョムスキーの区別した〝competence〟と〝performance〟の考え方から言って，文がもし〝competence〟と関連付けられるのなら，文法的記述を通してその文の塊を処理することも充分かもしれないが，〝performance〟に関心を向ければ，分析は文のレベルを越えて，その判断はテクストそのものに依存せざるを得なくなる。言語学プロパーではその分析の最大単位は文即ち同一文内での個々の要素の検討ということになるので，このギャップを埋めようとすれば，様々なアプローチが可能になるより大きな次元を以って，そこに位置付けられる諸単位間の内的連関の性質に目を向けねばならない，というのである。この観点が，文体論の観点からも文学テクストの分析でもありふれたものとして厳密な検討に伏されて来なかったとして，彼はこの〝関係〟概念を追求していくのであるが，結論を要約すれば，こうである。即ち，意味から始めてそれが如何に形式に反映されているかを研究する(〝内から外へ〟の）文法学者とその逆（〝外から内へ〟）の文法学者があって，そのいずれの方向からでもテクスト分析は可能で，この文法分析の二つのアプローチは等しく文学的文体の研究に応用出来る。ただ，例えばO．イエスペルセンが，形式・意味・機能を区別して，〝内から外へ〟の分析を語るときには二つの可能性（〝意味から形式へ〟と〝機能から形式へ〟）があったように，文を越えた言語学的拡がりの新しい可能性は，この〝機能から形式へ〟によって開かれるというのである。換言すれば，「機能から形式へという言語学の拡張について語ることは，区別の

ポイントとして，批評の形式的手段（言語学的展望からみれば〝機能〟）を採用し，これらを特定の統語的または文法的工夫と関係付けようとする分析のモードに見合うようにしなければならない」[49] ということである。彼はこの観点に立って，言語の諸単位の内的連関に目を向け，新しい〝機能〟の発見を通して文体分析の道を探ろうというのである。

ここで変形生成文法派に直接は関係しないヘンドリックスの見解を取り挙げたのは，今日の文体分析が，彼のこうした論点を抱えながら，二つの流れ（新ファース派と変形生成文法派）を結びつけているからである。本稿では，こうした今日の状況に触れる余裕がなかった関係上，また具体的な分析例を挙げなかった関係上，変形生成文法の活用として本稿で言及した枠内で検討がなされている最近の分析例を次に紹介する。

4. 変形生成文法の活用による最近の分析例

ここで取りあげるのは，S. J. カイザーが，W. スティーブンズの詩4編に分析を加えたもののひとつ，〝The Snow Man〟の分析例である[50]。彼はこの分析で，この詩にみられる統語的混乱が，その意味内容にとって必須のものであるばかりか，統語上の形式と意味が絶妙に一致していることを示している。その要点を列記する形で示すと，以下のようになる。

The Snow Man

One must have a mind of winter
To regard the frost and the boughs
Of the pine-trees crusted with snow;

And have been cold a long time
To behold the junipers shagged with ice,
The spruces rough in the distant giltter

Of the January sun; and not to think
Of any misery in the sound of the wind
In the sound of a few leaves,

Which is the sound of the land
Full of the same wind
That is blowing in the same bare place

For the listener, who listens in the snow
And, nothing himself, beholds
Nothing that is not there and the nothing that is.

（雪に固められた松の枝や霜を　／　見ると，人は　／　冬の心に満されるもの。//
だがまた，氷でばさばさになった杜松を　／　見ては，長らく寒さの中に留まっていなければならない　／　1月の陽の遠いきらめきに　//
とうひはかき乱され　／　わずかに残る木の葉を吹き抜ける風音の中で　／　どのような悲哀

も覚えないために　//
この冬枯れの地表に吹きすさぶ　／　風で覆われるばかりの　／　大地の音の中で。　//
かくて，聴く者は，この霜の中で耳傾ける，　／　そこには彼の他に何もなく　／　そこに無いものを見つめようとすることはない，見つめるのはただ虚無ばかり。//

— 筆者試訳 — ）

1）第一連は，ひと目で，ひとつの完全な文とわかる。しかし大切なことは，第二連の初めを読み継いだとき，そこに（‘one must’の）省略があるために，第一連をその最後で明らかにひとつの文として限定したにもかかわらず，実際はそれがひとつの等位文の最初のメンバーであるという‘読み替え’を強いられる点である。そして，第二連初めの‘And’で形成されるこの等位文は，第三連第一詩行半ばのセミコロンで終わり，ここに，（主節）＋（‘複合目的語を取る不完全な従位接続詞を伴う’従属節）というメンバーが‘And’によって繰り返されることになるほぼ完全なシンメトリーが形成される。

2）しかし，さらに読者の胸を打つのは，第三連第一詩行半ばに現われる省略である。即ち‘not to think’の前に‘and’があることで，統語的・意味論的に第二連第二詩行の‘behold’を等位のものと受け取らざるを得ないようなもうひとつの従属句としてここを読み替えざるを得なくなるのである。図Aに示すように，第二連と第三連は，この‘and’によってさらにシンメトリカルな二つの等位文を形成することがわかる。第一・二連の等位関係に比べれば，この第二・三連は埋め込みのより深いレベルにおけるものである。こうした統語的工

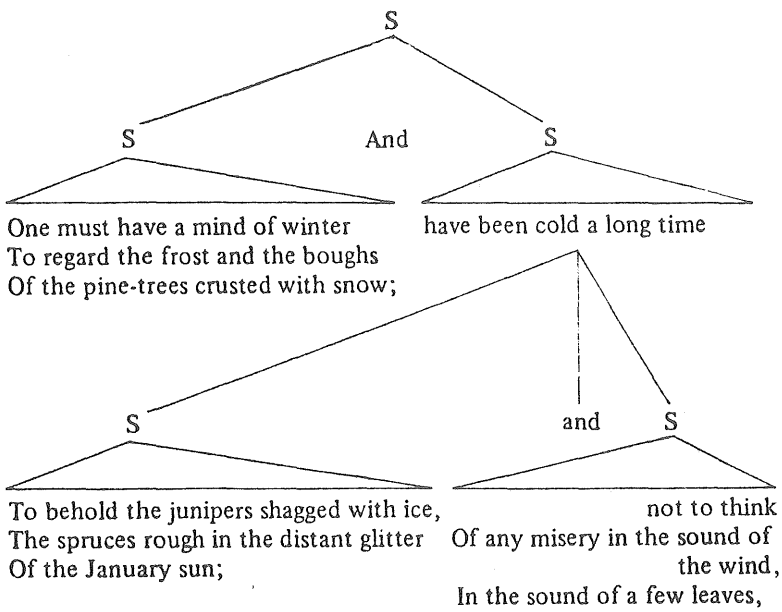

図　A

夫が成立するのは，第三連の＇To behold＇以下の句構造が，第一連の＇to regard＇以下の句構造を反映すると同時に，第三連の＇and not to think＇以下の句構造に反映されるという二重の役割を背負っているからである。

3）第四連は，統語的には第三連最終詩行の名詞句＇the sound of a few leaves＇を受ける形で，一連の繰り返しによる関係詞節から成っている（図B）。そして，この繰り返しに伴って，或る語に明らかに繰り返しが生じている。即ち，第三連第二詩行のひとつの名詞句に現われた＇sound＇と＇wind＇のうち，＇sound＇は，次の第三詩行の＇sound＇に反響し，それが第四連第一詩行の始めの関係詞節にも繰り返し現われる。一方，＇wind＇は，その次の第二の関係詞節に繰り返される。また，この詩行の＇same＇が，次の第三の関係詞節にも繰り返し現われる。この一連の反復を通じて，頭韻／s／が四度生じる。この頭韻法は明らかに音象徴であり，それはこの詩全体の構成主題の風の音に相応する。

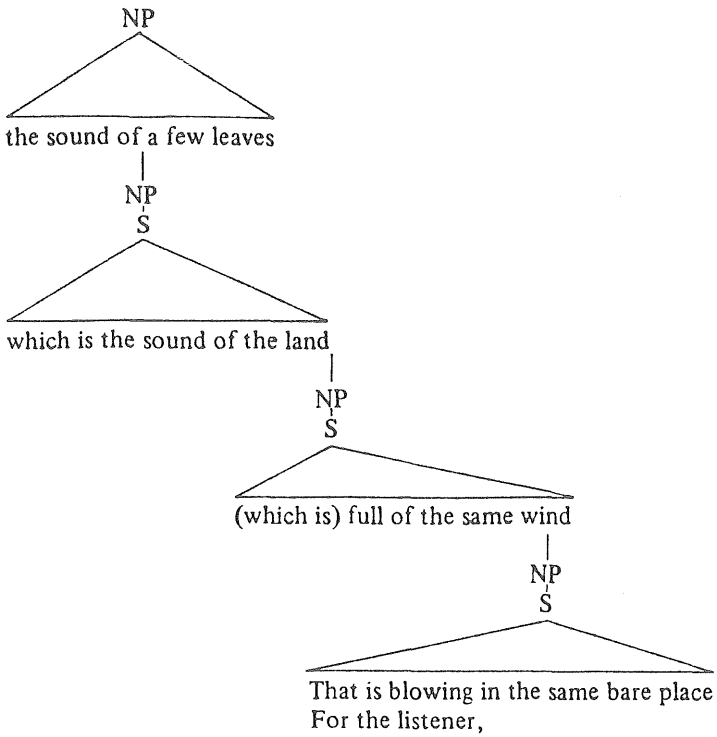

図　B

4）こうした関係詞節の連繋を受けて，最終連も関係代名詞で始まって行くが，図Cに示すように，この連は既に見た構造の全てのそっくりそのままの構造的反復として構成されている。即ち，図Aが重文Sを含んだまさにそのように複合動詞句を含み，さらに，複合動詞の第二の

接続（句）は，図Ａで重文Ｓの第二の接続（節）がひとつの重文を含んだように，ひとつの複合名詞句を含んでいる。

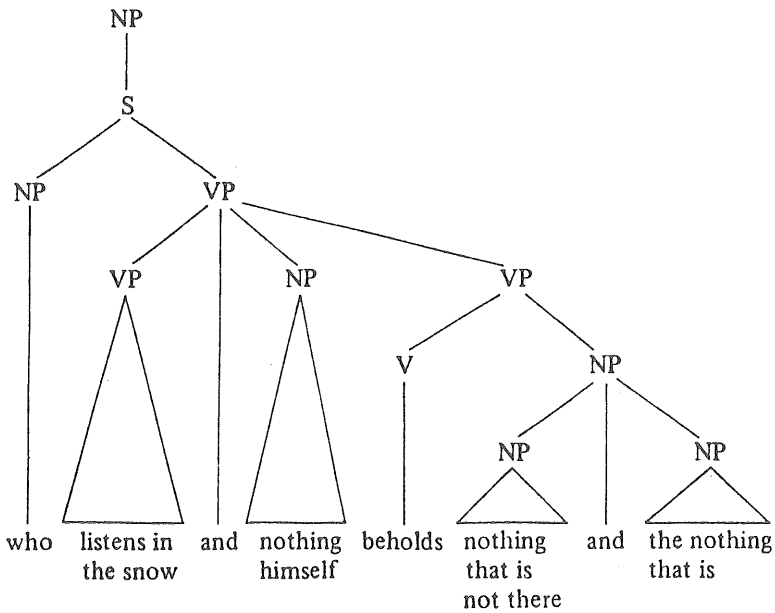

図　C

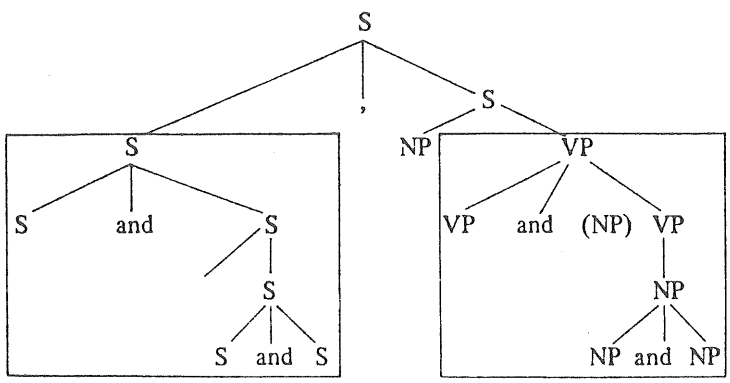

図　D

5）この4）で見た最終連の構造をそれ以前の連に結びつける方法は二つ考えられる。ひとつは上に見たように，単に関係詞節の反復として図Bの右端に付け加えるものである。しかしもうひとつ別の考え方がある。以前から非制限的関係節と等位節との間に類似のあることが指摘されており，この連結節（ conjoined clause ）から導かれるものとして非制限的なものを扱う妥当性を考えると，図Cはひとつの連結文（ conjoined sentence）の一方の接続部分と見ることが出来るということである。即ち，図Cの統語構造は，それ以前の連でスティーブンズの使った技巧の繰り返しであり，先行する構造とパラレルであるということになる。これを図示すると，図Dのようになる。（ただし，パラレルな部分はカッコでくくられ，この詩の始めの部分と最終連との間の構造的平行性を強調するために図は簡略化されている。）このような分析を採用する理由は，ここに示す合成的な構造の方が，この詩を通じて幾つかのキー・ポイントで読者に〝読み替え〟を強いるものと一致するからである。

6）次にこの詩の意味と形式との関連を考えてみる。スティーブンズは或る手紙で，「私はリアリティを理解し，享受するために，人がリアリティとアイデンティファイする必要性の一例として，〝the Snow Man〟を説明したい」と書いており，このひとつの明白な流儀で冬の或るリアリティを受け入れる必要性がこの詩の形式と結びついているのである。即ち，……人はまず松の枝や霜をみるための心の特定の状態（冬の心）を持つ。しかしこの状態自体がそのまま〝どのような悲哀を覚えることもないような〟冬の心を持つ根拠にはならない。ただ，もし長らくこうした冬の心（寒さ）の中に留まったなら，悲哀を覚えることなしに冬を眺めることが出来るようになるだろう。そして，こうしてこそ〝Nothing that is not there and the nothing that is.〟を見詰めることの出来る一人の聴き手になる。即ちこの心の究極状態で，この〝Nothing that is not there〟をはっきり眺め，そこに存在するただそれだけのものを見詰めて，遂にリアルにそこに在る〝the nothing〟を了解するだろう。…… こうした一連の認識の展開が，そのままこの詩では，一連の統語形式上の変化・展開によって成し遂げられるよう構成されている。先に見たように，ひとつの統語的パターンがその構造内では明確であると思われるのに，次の一瞬には全くの〝読み替え〟を要求されるのであり，この繰り返される〝読み替え〟（統語的展望の変化）は，言わば，より正確にリアリティを理解するための階梯となるのである。そして，これほどまで詩の統語を詩の内容の実質的なアレゴリーにするということは，稀に見るひとつの輝かしい詩的達成であると言わねばならない。

以上のように，カイザーは，スティーブンズの技巧の冴えを，その分析に鮮やかに反映してみせた。ここでは，（たとえそれがこの詩に内在するものとはいえ）このように明確な形で技巧の実態を顕在化し得たこと，及びその手法が変形生成文法派流の記述によって成されたことを寸言するに留める。

〈後　記〉

今日の高度に精密化した言語理論は，そのひとつですら充分に理解することは難かしい。今回，

変形生成文法派の文体分析を取りあげるに当って，その依って立つ言語理論に対する理解不足もあって，叙述を60年代の展開に限定した。70年代の理論的動向については，他日改めて稿を起こすことにして，次回は〝新ファース派〟の文体分析を取りあげるつもりである。

〔注〕

1） G. N. Leech, 'A linguistic guide to English poetry', London: Longman (1969) pp. 42–55.

2） R. Fowler, 'Linguistics, Stylistics; Criticism?', Lingua, 16 (1966) pp. 153–165.

3） Trager and Smith, 'Outline of English Structure', American Council of Learned Societies, Washington (1951).
H. Whitehall, Kenyon Review xiii (1951) pp. 710–714., xviii (1956) pp. 411–421.
S. Chatman, 'Robert Frost's "Mowing": an inquiry into prosodic structure', PMLA 1xx (1955) pp. 321–438.

4） S. R. Levin, 'Linguistic Structure In Poetry', Janua Linguarum NR. 23, Mouton & Co.'s-Gravenhage (1962).

5） S. R. Levin, 'Deviation-Statistical And Determinate-In Poetic Language', Lingua, 12 (1963) pp. 276–290.

6） S. R. Levin, 'Internal and External Deviation in Poetry', Word, 21 (1965) p. 226.

7） S. R. Levin, op. cit., (1962) p. 14.

8） See, S. R. Levin, 'Poetry and Grammaticalness', in Proceedings of the 9th International Congress of Linguists, The Hague : Mouton (1964).

9） S. R. Levin, op. cit., (1962) p. 19.

10） S. R. Levin, op. cit., (1963) pp. 286–290.

11） See, M. Riffaterre, 'Stylistic Context', Word, 16 (1960) pp. 207–218.
及び，M. リファテール「文体論序説」（福井芳男他訳）朝日出版社，1978年.

12） S. R. Levin, op. cit., (1963) p. 278.

13） M. Riffaterre, op. cit., (1960) pp. 209ff.

14） S. R. Levin, op. cit., (1963) p. 282.

15） S. R. Levin, op. cit., (1965) p. 226.

16） S. R. Levin, op. cit., (1962) p. 29.

17） Ibid., pp. 30ff.

18） S. R. Levin, op. cit., (1964) pp. 203ff.

19） T. P. Thorne, 'Stylistics and generative grammers', Journal of Linguistics, 1 (1965) p. 51.

20） Ibid., p. 51.

21） S. Saporta, 'The Application of Linguistics to the Study of Poetic Language', in "Style in Language" (ed. T. Sebeok) M. I. T. Press (1960) p. 86.

22） See, S. R. Levin, op. cit., (1962).

23） T. P. Thorne, op. cit., (1965) p. 56.

24） Ibid., p. 58.

25） T. P. Thorne, 'Poetry, stylistics and imaginary grammars', Journal of Linguistics, 5 (1969) p. 149.

26） Ibid., p. 148.

27） Ibid., p. 148.

28） T. P. ソーン，「生成文法と文体分析」《 J。ライオンズ編著「現代の言語学」(下) 田中春美監訳，大修館書店， 1973年収録》 8 頁，20頁.

29） T. P. Thorne, op. cit., (1969) p. 148.

30） W. O. Hendricks, 'Three models for the description of poetry', Journal of Linguistics, 5 (1969) pp. 1–22.

31） Ibid., p. 3.

32） See, N. Chomsky, 'Aspects of the Theory of Syntax', M. I. T. Press (1965).

33） T. P. Thorne, op. cit., (1969) p. 150.

34） See, R. Ohmann, 'Show; The Style and the Man', Middletown, Conn., (1962).

35） R. オーマン，「生成文法と文体の概念」(1964)「文の集まりとしての文学」(1966) 《ともに，マーク・レスター編著，「応用変形文法」(安井稔監訳) 大修館書店，1972年収録》

36） 同上書，152頁

37） Leo Spitzer, 'Linguistics and Literary History', Princeton (1948) p. 198

38） D. ドゥラス，J。フィリオレ，「詩の言語学」(田村毅，広川忍共訳) 朝日出版社，1976年.

39） R。オーマン，上掲書，154頁.

40） S. R. Levin, op. cit., (1963) p. 284.

41） T. P。ソーン，上掲書，5頁.

42） R. A. ジェイコブス，P. S. ローゼンボーム「文体と意味」(松浪有・吉野利弘訳) 大修館書店，1972年.

43） I. R. ガリペリン，「詩的言語学入門」(磯谷孝訳) 研究社，1978年，187頁.

44） See, M. A. K. Halliday, R. Hasan, 'Cohesion in English', Longman (1976).

45） R. オーマン，上掲書，156頁.

46） T. P。ソーン，上掲書，7頁.

47） R. オーマン，上掲書，188頁。

48） W. O. Hendricks, 'On the notion "Beyond the Sentence"', Linguistics, 37 (1967)

pp. 12–51.

49) Ibid., p. 33.

50) S. T. Keyser, 'Wallace Stevens: Form and meaning in four poems', in "Linguistic Perspectives on Literature" (eds. M. K. L. Ching, M. C. Haley, R. F. Lunsford) Routledge & Kegan Paul (1980) pp. 270–281.